

日本音楽集団

PRO MUSICA NIPPONIA

第 164 回定期演奏会

The 164th Regular Concert

2001 年コンサート・シリーズ—未来への波

海外からの作品特集～その V～

前世紀の^{ハン}恨を超えて

Special program of Compositions from Abroad vol.5 ~ Han ~

企画・構成 三橋貴風

2001 年 9 月 19 日(水) 津田ホール

午後 6 時よりプレトーク<作曲者に聞く> 司会：石田一志

午後 7 時開演

主催

特定非営利活動法人 日本音楽集団

後援

ドイツ連邦共和国大使館・ブルガリア共和国大使館

エクアドル共和国大使館・中華人民共和国駐日本国大使館文化部

駐日韓国大使館・文化院・駐日クロアチア共和国大使館

助成

文化庁・日本芸術文化振興会

舞台芸術振興事業

(財)ロームミュージックファンデーション



Arts Plan 21



芸術文化振興基金

プログラム

一、Zugvögel (渡り鳥) (1986年委嘱作品)

Jurgen Buttkewitz (ユルゲン・ブトケヴィッツ) 作曲 (ドイツ)

[尺八] I 米澤浩 II 水川寿也 [二十絃箏] 熊沢栄利子 [指揮] 田村文生

二、Nighttime Cycles (廻る夜) (委嘱・世界初演)

Srdan Dedic (スルジャン・デディチ) 作曲 (クロアチア)

[尺八] I 三橋貴風 II 水川寿也 III 添川浩史

三、Utafuganizza (歌にフーガにラチェニツァ) (1996年委嘱作品)

Boyko Stoyanov (ボイコ・ストヤノフ) 作曲 (ブルガリア)

[細棹三味線] I 杵家七三 II 簗田司郎 [太棹三味線] 山崎千鶴子

[琵琶] I 田原順子 II 首藤久美子

[声] 竹井誠・三橋貴風・田村文生

～ 休 憩 ～

四、Double Duo (複二重奏曲) (1996年委嘱作品)

Diego Luzuriaga (ディエゴ・ルズリアガ) 作曲 (エクアドル)

[笛] I 西川浩平 II 竹井誠 [打楽器] I 尾崎太一 II 細谷一郎 (助演)

五、Words of the Soul (魂の言葉) (委嘱・世界初演) 朴銀荷作曲 (韓国)

[箏] 稲葉明德 [笙] I 真鍋尚之 II 野田説子

[二十絃箏] I 山田明美 II 岸川光代 III 早川智子 [十七絃] 宮越圭子

六、Windy Days II (刮風の日II) (1998年) 陳明志作曲 (中国)

[尺八 solo] 三橋貴風 [二十絃箏 solo] 吉村七重

[笛] 越智成人 [尺八] I 米澤浩 II 砂川憲和 III 添川浩史

[三味線] 山崎千鶴子 [琵琶] 首藤久美子

[二十絃箏] I 熊沢栄利子・丸岡映美 II 桜井智永・久本桂子 III 田村法子・渡辺正子

[十七絃] 徳野礼子・山田由紀

[打楽器] I 尾崎太一 II 細谷一郎 (助演)

[指揮] 田村文生

渡り鳥 ユルゲン・ブトケヴィッツ

渡り鳥は毎年大小の群れになって知らないうちにどこからともなく集まり、北から南へと、あるいは南から北へと季節や天候を推し量りながら旅をします。この移動はお互いを助け合いつつ平穏のうちに成し遂げられます。移動が終わると離ればなれになりますが、もしかすると次ぎの、またその先の旅で再会するのもかも知れません。

これは私たちの人生に似通っています。人は巡りあいによって、暖かい友情で結びついたり、短い間生活を共にしたりします。が、人生の様々な状況の為に離ればなれになってしまいます。そして人は別々の「大陸」に住まいながらも、またいつの日にか、渡り鳥のように相目見ることがあるのかも知れません。この作品は、日本の友人たちへの、細やかながらの私の心のプレゼントのつもりです。 (初演プログラムより)

Jurgen Buttkewitz ユルゲン・ブトケヴィッツ (ドイツ) — 日本音楽集団が1981年に旧東ドイツ時代のライブツィッヒでゲヴァント・ハウス・オーケストラと協演した折、現ニューヨーク・フィルハーモニーのマエストロ、クルト・マズア氏により紹介をされた作曲家。

廻る夜 スルジャン・デディチ

私が日本の音楽と伝統楽器に出会ったのは、文化庁の外国人芸術家招聘活動の一員として招聘され、日本に滞在したときでした。日本の音楽を知る一方で私は、音楽の新たな、未知なる、しかし魅力的なアプローチの方法に対峙するようになりました。日本音楽集団の皆さんによる楽器についてのレクチャー、質の高い演奏録音や私が聞かせて頂いたリサイタルは、日本の素晴らしい楽器について理解するために、非常に役立ちました。

尺八のための現代音楽についての私の見解を提示するとともに、尺八の伝統とその精神を残している「廻る夜」は、ある同じ要素が、常に違った方法で周期的に繰り返されるという仕組みを持った、いくつかのセクションで成り立っています。それぞれのセクションでは、ソロのような繊細な「鈴慕」から、力強い3声の「むら息」のパッセージまで、声部が様々な変化します。尺八の基本音階というものは五音音階ですので、この作品での基本音列が、異なる声部や音域を縫うように通り抜け、不協和な音が垂直的・水平的音響特性を絶え間無く作り出しながら、複雑な音響に達するという事は非常に挑戦的作業でした。

今回、現代音楽における伝統楽器の立場を維持している日本音楽集団の、貴重でかつ価値ある御尽力の一助となるこの機会を大変名誉に思います。 (スルジャン・デディチ)

Srdan Didic スルジャン・デディチ (クロアチア) — 現ベルギーの国立オペラシアターの監督の指揮者大野和士氏がクロアチアに滞在中に出会い、その後来日をして入野義朗JMLセミナーで日本の現代音楽を研究の後に帰国。現在オランダのアムステルダムに在住。

歌にフーガにラチェニツァ ボイコ・ストヤノフ

私が三橋貴風さんに初めてお会いしたのは、自分が国際交流基金のフェローとして日本に滞在していた1981年の事だったと思います。それはやはりフェローとして中国から日本へ来ていた王燕樵氏の紹介でした。確か王さんはこの作品シリーズの第一回目に曲を書いた事を覚えています。その後日本のいわき市に住む事になりましたが、地元でも色々な日本の伝統楽器、三味線、琵琶、笛、尺八、打楽器などを演奏する人に接する事が出来、自分にとっても日本の楽器は既にとても身近なものとなっていました。特に1993年の夏、自分の故郷

ブルガリアのヴァルナ・フェスティバルや、ポーランドの古城の中で、三橋貴風さんの尺八と自分のコンピューターミュージックのセッションを行い、尺八という日本の伝統楽器の表現力の深さにも本当に感動を覚えました。今回はその三橋さんからの委嘱を受け、三味線、太棹、琵琶の合奏曲を書かせて頂いた事は、作曲家としての自分にとってとても大きな経験となりました。今夜の企画をして下さったプロデューサーの三橋貴風さんと、主催者の日本音楽集団の皆様に深く感謝を申し上げます。

曲目の日本語、歌とフーガとラチェニツァ（ブルガリアの民族的な7拍子系の音楽）を組み合わせた新しい言葉を作りました。（初演プログラムより）

Boyko Stoyanow ボイコ・ストヤノフ（ブルガリア）— ソフィア音楽大学を卒業。ワルシャワ・ショパン・アカデミーで作曲を学ぶ。国際交流基金の人物交流で来日し、今シリーズ第1回目の委嘱作品の作曲者である中国の王燕樵氏の紹介により、日本音楽集団で日本の楽器について学ぶ。

複二重奏曲 ディエゴ・ルズリアガ

エクアドルの楽器にはなじみの深い私ですが、この度初めて日本楽器のための作曲をしました。日本の笛とエクアドルの笛の共通点は、土くささとあたたかな音色にあると思います。このことは私の曲を表現するのに最適な要素でした。

第1楽章 The Call（呼びかけ）

小鼓と大鼓の呼びかけに能管がうめくように音をすり下げながら答えます。

第2楽章 Song（うた）

ゆっくりと安定したうねりをもった篠笛と篠笛の悲しい対話です。

第3楽章 Salasaca Dance（サラサカ・ダンス）

エクアドルのアンデスに住むサラサカインディオ達の演奏曲中、早いダンスの部分の旋律をもとにして作りました。（初演プログラムより）

Diego Luzuriaga ディエゴ・ルズリアガ（エクアドル）— クウェートの国立音楽院、ニューヨークのコロンビア大学で作曲を学び、ブラジリア大学で作曲を教える。ヨーロッパ各国及び自国のオーケストラ等の委嘱を受ける。作曲家の松尾祐孝氏の紹介により日本音楽集団と巡り合う。

魂の言葉 朴銀荷

この曲は、2001年、日本音楽集団（Pro Musica Nipponia）の委嘱作品である。私が通っているエリザベート大学（Elizabeth）の隣には、平和記念聖堂がある。日曜日のミサの後、私は人の気配がないこの大聖堂を独り占めすることがなにより楽しい時である。ここには聖なる沈黙、という空間の中に沈黙の響きが存在するからである。この沈黙の響きは、まるで、神の言葉のように私は感じたのである。音を出す行為だけではなく、沈黙の中にも様々な響きが存在することに気付き、この曲を書き始めた。（朴 銀荷）

朴 銀荷 パク・ウンハ（韓国）— 作曲家の松下功氏の紹介により日本音楽集団から委嘱作品を依頼される。自国で西洋の作曲技法を及び民族音楽を研究の後、現在に広島市に在住しエリザベート音楽大学に於いて作曲を学ぶ。

刮風の日Ⅱ 陳 明志

風のある日 作詩 陳中禧

「髭を剃らなで
風のある朝を待つ
天声が顔に吹き付け
崖の暗がり
雷の悲しみ
鳴り響く」

詩人は我に「風がどんな風景を描くか」という質問を投げつけた。その答えは、風が崖の暗がり、雷の悲しみを浮き彫りにしたということになるだろう。

世の中、最も強いものであっても、自らの無力を感じる時があり、逆に最も柔らかいものであっても、力を寄せ集めれば、堅固な障壁を打ち破る時がある。嵐の夜、稲妻と雷が人のために涙をならし、なぜ彼らが悲しむと思うか。

この曲は、陳中禧による同名の詩作を素材にし、尺八の吹き出す氣息（風）、二十絃箏の刻みだす間（雨）、による響きの全体配置（大地）から構成されており、風と雨が如何に絶え間なく変化する姿で世の中の人に様々な問いを投げつけるあり方を描いた。（陳 明志）

陳 明志 チン・ミンチー（中国香港）— 自国で作曲を学んだ後、東京芸術大学に留学。その後、日本の伝統楽器の為に数曲作品を発表している。今回は中国の民族楽団と日本の箏・尺八をソロ楽器とした複協奏曲を日本音楽集団の為に改訂初演として発表する。

御 挨拶

このシリーズ『海外からの作品特集』は、1981年に第一回目が実施され、以後5年に一度のペースで開催されて今回2001年度が5回目となります。

第一回目より今回まで計18ヶ国延べ29曲の作品に接する事となりました。それらの音楽を書いて下さった作曲家の中には、「Golden Sparrow(金雀)」を日本初の委嘱作品として残したTan Dun(譚盾)氏もおり、彼は今や世界の寵児として活躍しています。

シリーズ自体には毎回それぞれにテーマ性を持たせ、前回のようにコンサートを二分して南米と東欧の作品群に絞っての紹介等を致しましたが、今回は21世紀の初年と云うタイミングを念頭に置いてプログラミングを考えさせて頂きました。

激動といわれた20世紀でしたが、情報伝達機能の飛躍的な発達と共に世界の各民族間の様々な価値観(思想・宗教及び経済・政治等)の差が浮き彫りとなり、とくに世紀の後半においては世界中の地図区分の練り直しが頻発する状況となりました。その様な世情のもとで民族的にも国家的にも、また音楽家個人の環境としても決して恵まれていない立場にありながらも個々の創作活動は継続されて参りました。その渦中からの芸術家の魂の発露としての創造に意識を据え、20世紀に様々な想いを残した国々の作品をお聴き戴きたいとおもいます。ここに本日のプレトーク、コンサートの為にご協力を下さいました多くの方々は大いなる感謝を申し上げます。
(プロデューサー：三橋貴風)

● **Zugvöegel ("Birds of passage")** Jurgen BUTTKEWITZ

Every year, arriving from here and there, birds of passage form large or small groups to fly together from south to north or north to south. While doing so they judge the season or the weather and calmly help and support each other. Though they split up after arriving at their destination, quite possibly they will meet again for their voyage the following year or the year thereafter.

This activity resembles my own life in many ways. Warm friendships are forged with people I meet and we share our lives for a short period of time. For any number of reasons we break up again, but after living on various continents we end up meeting again, much like birds of passage. This composition is a small present from my heart to my Japanese friends.

● **Nighttime Cycles** Srdan DEDIC

I came into contact with Japanese music and traditional instruments during my stay in Japan as a participant of the Bunka-Cho Program for Foreign Artists. While getting acquainted with Japanese music, I was confronted with new, unknown but intriguing approaches to music. Lectures on Japanese traditional instruments given by the members of "Pro Musica Nipponia", as well as their high quality recordings and recitals I have attended, greatly influenced my comprehension of these beautiful instruments.

The composition "Nighttime Cycles" represents my vision of a contemporary music for shakuhachi that at the same time remains within a spirit of the instrument and its tradition. The composition consists of a number of sections whose elements are repeated in cycles, always in a different form. The number of voices in sections varies, from the subtle "Reibo" like solos to powerful three-voice "Muraiki" passages. The same pitch matrix is threading through different voices and registers, continually creating a particular type of dissonance, both in the Vertical and Horizontal sonority. Since the basic pitches of shakuhachi make a pentatonic scale, achieving a complex sonority was a challenging task.

The opportunity to make a small contribution to such an important and worthy effort by the "Pro Musica Nipponia" to preserve a place for traditional instruments in contemporary music, was a great honor for me.

● **Utafuganizza** Boyko STOYANOV

I think I first met Mr. Kifu Mitsunashi in 1981 when I was staying in Japan on a fellowship from the International Cultural Exchange Foundation. I was introduced to Mr. Mitsunashi by a fellow recipient from China, Mr. Ou Enshoh I believe Mr. Ou composed a piece for the first concert in this series. After that I lived in Iwaki for some time, where I came in contact with performers of various traditional Japanese instruments such as Shamisen, Biwa, Fue, Shakuhachi, and Percussion, and since then, I have felt very familiar with Japanese instruments. Especially in the summer of 1993 I was greatly moved by the deep expressiveness of the shakuhachi during the Varna Festival in my home country, Bulgaria, and in old castle in Poland, where Mr. Mitsunashi and I did sessions together of Shakuhachi and Computer music.

It was great experience for me as a composer to accept the commission from Mr. Mitsuhashi to write an ensemble piece for Shamisen, Futozao, and Biwa. I deeply thank both the producer, Mr. Kifu Mitsuhashi and Pro Musica Nipponia for sponsoring this evening's concert. For the title of the composition, I created a new word by fusing the Japanese word "uta" (song) with the Musical words "fuga" and "Racheniza" (a Bulgarian folk type music in 7 beats).

● **Double Duo** **Diego LUZURIAGA**

I think both Japanese and Ecuadorian flutes have an earthy and warm sound color, which I find suitable for expressing my musical ideas. While being very familiar with traditional Japanese instruments, this is the first time I have attempted to write music for respond to the call of the Ohkawa and Kotsuzumi, bendings their tone down, as if moaning. The second movement, "Song" is a melancholic dialogue between two Shino-bues, based on a constant slow pulse. The last movement, "Salasaca dance" is based on a single, fast, dancing melody which I heard played by the Salasaca indians in the Ecuadorian Andes. "Double Duo" was commissioned by "Pro Musica Nipponia" and lasts approximately twelve minutes.

● **Words of the Soul** **Park Eun-Ha**

Words of the Soul was composed this year (2001) on commission from Pro Musica Nipponia. Adjoining the garden of Elisabeth University of Music in Hiroshima, where I am currently in doctoral studies, is the World Peace Memorial cathedral. After Sunday Mass, when the congregation have all left the Cathedral, I am free to spend time there alone, time that I enjoy more than any other. In the empty church I find a sacred silence, a space in which exist silent sounds. To me, these silent sounds have felt like words from God. In this discovery - that sounds come not only from sound-producing activity but exist in the heart of silence as well - I composed Words of the Soul.

● **Windy Days**

Don't shave your bread
Wait till one windy morning when
The heavenly notes will strike your face
Singing of a dark gloomy precipice
Deep sorrow amidst roaring thunder

Teasing her friend, the poetess a question: "What picture is the wind painting?" The answer is: "We feel the penetrating sorrow in the roaring thunder"

Even, the strongest element may experience moments of weakness and helplessness. Likewise, the softest element may gather strength and destroy the hardest element and overturn barricades. On a stormy night, the lightning and thunder are crying for mankind. What, in your opinion, are they lamenting?

The music was inspired by Glories Ng's poem Wind Days. As the narrative of the music unfolds through the orchestra, the shakuhachi and the 20-string koto, the audience finds themselves confronted by countless questions as the sound of the wind and rain resound around them.

賛助会員 (五十音順、敬称略)

法人	朝吹 英世	今村 文彦	桜田 正憲	藤澤 美恵
(株)全音楽譜出版社	安達 眞五	植木 眞代	佐々木浩二	古川羽衣山
(株)宮本卯之助商店	新井 克輔	大関 富枝	柴田 寛二	本田 実
	飯塚 絹子	太田 颯衣	杉田 和繁	水野 正徳
個人	飯吉 正山	川壁 正	関 厚雄	森山 俊雄
中島 靖子	家永 和治	岸 彰則	田原 たま	山崎 時男
	逸見 護	木津 のぶ	堤 紀江	渡辺 京子
青戸 順子	伊藤美恵子	後藤 隆	手塚 愛子	渡辺 ハル
青柳 堯	今村 厚子	後藤 陽子	野原 清子	渡辺 治子

賛助会員へのお誘い

1999年10月、特定非営利活動法人日本音楽集団が発足したのを契機に、賛助会員を募集しています。多くの方々からの支援を仰ぎ、息の長い活動を目指したく、ご協力お願い申し上げます。募集の詳細はチラシをご参照ください。

〒151-0073 東京都渋谷区笹塚3-17-1 滝沢ビル302 TEL03-3378-4741 FAX03-3376-2033
ホームページ URL <http://www.promusica.or.jp/index.html> E-Mail office@promusica.or.jp

箏

二十絃箏

箏を愛するすべての人の繊細な感情を忠実に音に表現するために、楽器の本質を追求した箏

日本音楽集団推薦

有限会社 琴光堂

東京都目黒区碑文谷2-19-15 TEL(3792)8481 FAX(3792)8437